



インド集

ヴェーダ文学 二大叙事詩 仏教文学
古典劇 サンスクリット抒情詩 説話
文学他 近代文学

辻直四郎・前田式子・田中於菟弥
前田恵学・岩本裕・土井久弥 訳

世界文学大系 4

インド集

昭和34年5月15日発行

定価 550 円

訳者代表 辻 直 四 郎

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 多 田 基

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 4123 電話 (291) 局 7651

目次

ヴェーダ文学

辻直四郎訳

リグ・ヴェーダ讃歌

5

アタルヴァ・ヴェーダ讃歌

38

ブラーフmana散文の挿話

54

ウパニシャッド

65

二大叙事詩

マハー・バーラタ

——サーヴィトリ物語——

前田式子訳

79

ラーマヤナ

——アヨードィヤーの巻——

田中於菟弥訳

92

仏教文学

前田恵学訳

ブッダの開教（マハーヴァツガ）

111

真理のことは（ダンマパダ）

140

本生物語集（ジャータカ）

159

古典劇

土の小車

シヤクンタラー

サンスクリット抒情詩

説話文学 他

パンチャ・タントラとヒトーバデーシヤ

カタール・サリット・サーガラ

——愚者物語——

カーマ・スートラ

近代文学

牛供養

インド文学小史

インド文学年表

シュードラカ

岩本 裕訳

田中於菟 弥訳

田中於菟 弥訳

岩本 裕訳

パンチャ・タントラとヒトーバデーシヤ

カタール・サリット・サーガラ

——愚者物語——

カーマ・スートラ

近代文学

牛供養

インド文学小史

インド文学年表

装 幀 庫 田 發

504 496 373 361 349 345 333 275 183

ヴェーダ文学

古典劇

土の小車

シャクンタラー

シュードラ
岩本 裕訳 183

カーリダーサ
田中於菟 弥訳 275

サンスクリット抒情詩

田中於菟 弥訳 333

説話文学他

岩本 裕訳

パンチャ・タントラとヒトーパデーシヤ

345

カター・サリット・サーガラ

——愚者物語——

349

カーマ・スートラ

361

近代文学

牛供養

プレミアム・チャンド
土井久 弥訳 373

インド文学小史

田中於菟 弥 496

インド文学年表

504

装幀 庫田 發

リグ・ヴェーダ讃歌

現在^{現在}流布^{流布}するリグ・ヴェーダ本集（略してリグ・ヴェーダ）は、シャーカラ派所伝のもので、一〇巻に分かれ、一〇一七讃に補遺歌一篇を加えて合計一〇二八讃歌をふくむ。第二巻から第七巻までは、古代の祭官詩人の家集ともいふべきもので、本書の中核をなしている。第一巻と第八巻とは、この中核部に追加された部分で、第九巻はソーマ^酒に捧げられた讃歌のみをふくんで、特殊な性格をもち、第十巻は最新層を代表する。本書はヴェーダ文獻中もっとも古く（おそらく前一二〇〇年ころを中心）かつもっとも重要なもので、パンジャープへ侵入したアリアン人の宗教・神話・生活態度を伝える根本資料である。当時の宗教は本質的に多神教で、しかも多数の神々は交互に最上級の讃美を受けている。神々の中には、その基礎をなす自然現象を明示するものもあり、すでにその関係がいまいとなつたものもあり、抽象概念の神格化と認められるものもある。普通の讃歌のほか、一見祭式との関係の明瞭でない歌、哲學的思索の進展を示す歌等もあり、内容は多彩である。優秀な讃歌によつて神の敏心をかい、その結果として願望を成就し、庇護者たる王侯貴紳から多くの報酬を得るため、詩人のあいだに激しい

競争があつたらしく、文学的にすぐれた作品が多数に残っている。

リグ・ヴェーダの概要を、抜萃によつて伝えることは容易でない。各神格に捧げられた讃歌の数には非常な差がある。約二五〇讃歌をもつインドラ、約二〇〇讃歌をもつアグニの重要性は、数量的に計りえても、インドラとならんで神話界に重きをなすヴァルナの地位を、その僅少な讃歌数から推定することは許されない。ヴァルナの同伴ミトラにいたつては、わずかに一篇の独立讃歌を享有するにすぎない。それゆゑここでは、できうるかぎり主題の変化に富むこと、代表的あるいは有名な讃歌のうちから、なるべく予備知識を必要としないで理解できるものを取ることを、選択の基準とした。しかしリグ・ヴェーダの言語は、ヴェーダ語の最古層に属して難解をきわめている。一定の慣用句がくり返されると同時に、詩人は奇警の文句によつて人の意表にでることを意図し、率直な表現よりも、比喩・誇張・暗示・省略を好み、神話と人事、天界の現象と地上の出来事との区別をあいまいにしている。神話・語法に対する知識の不足が、理解を妨げる最大の原因をなしているとはいへ、世界各国の専門家の一世紀にわたる努力にもかかわらず、リグ・ヴェーダを満足に解釈できる日はいまだ遠い。訳文のはかに少なくも精密な注釈を必要とする。以下の翻訳は原文に忠実なことを期して大部分逐語訳によつたが、しばしば生硬かつ難解となつたことを遺憾とする。なお引用に使つた三個の数字は、順次に巻・讃歌・詩節の番号を示す。

天地両神の歌（一・一六〇）

天神ディヤウスは諸神の父、地神プリティヴィーは万物の慈母として称えられ、ほとんどつねに合同して、ディヤーヴァー・プリティヴィーの名のもとに讃歌の対象となつてゐる。

一 天地両神は万物に幸いし、天則^{*}を守り、空界の賢者^{（太）}を維持す。麗しきもの生む神聖なるこの両界のあいだを、清浄なる神太陽は、掟に従つて進む。

* 原語リタ、自然界・祭祀・道德の秩序をつらぬく神聖な理法・真理。

二 広く拡がり、偉大にして尽くることなき父と母と^{（太）}は、万物を保護す。天地は誇り高く美しき婦女のごとし、父（なる神）^{（本初）}の創が、美をもつて彼らを装いたれば。

三 両親^{（太）}の子、車に駕し・浄化の力ありて賢明なるもの^{（陽）}は、その奇しき力もて万物を清む。彼は、斑ある牝牛^{（地）}と善き種子ある牡牛^{（天）}とより、つねにその澄み輝く液^{（雨）}をしほる。

四 活動力ある神々の中にありてもっとも活動力あるこの神、万物に幸いする天地を生める神^{（第二節で父と神呼ばれたもの）}、賢慮によりて両界を測れる神は、朽つることなき支柱をもつて、（天地を）固めたり。

ヴェーダ（知識）は、前一五〇〇年頃（？）を中心として、インドの西北部パンジャーブ地方へ侵入したアリアン人の宗教すなわちバラモン教の根本聖典である。歴大なヴェーダの構成は複雑である。

文獻的ジャンルの区別から分類すれば、次の四部分となる。一、サンヒター（本集、マントラすなわち讃歌・歌詞・祭詞・呪法用讃歌をふくむ基本的部分。二、ブラーフマナ（梵書、前者に附随し、祭祀の説明を主体とする散文の部分。三、アーラヤカ（森林書、森林の中で伝授されるべき秘義・秘法を載せた部分。四、ウパニシャッド（奥義書、宇宙万象の一元を宣示した哲学的部分で、ヴェーダの最後部を形成するゆえ、ヴェーダーンタ（「ヴェーダの結尾」転じて「ヴェーダの極致」）とも呼ばれる。インドの伝承に従えば、これらの四部分は人間の著作と考えられず、古代の聖賢が靈感によって心耳に聞いた啓示と見なされ、天啓文学の名のもとに総括される。

ヴェーダは本質的に宗教文獻であり、当初から祭祀との関連において発達したものである。この見地から次の四種に分類される。一、リグ・ヴェーダ、諸神を祭場に勧請し、讃歌を唱えるホトリ祭官に属するもの。二、サーマ・ヴェーダ、祭式中に行なわれる歌詠を司どるウダガトリ祭官に属するもの。三、ヤジュル・ヴェーダ、祭式執行に必要な実務万端を担当するアドヴァルユ祭官に属するもの。四、アタルヴァ・ヴェーダ、前記三ヴェーダと性質を異にし、本来呪法に関するものであったが、後に内容の追加が起り、第四ヴェーダの地位を得て、祭式全般を総監するブラフマン祭官に属するものとされた。

たとえば、リグ・ヴェーダというとき、普通はその基本的部分たる本集だけを指すが、厳密にはウパニシャッドにいたる全要素を含むこととなる。他のヴェーダについても同様である。ヴェーダ文獻の構成をさらに複雑化したのは、学派の発達である。その結果、現存するリグ・ヴェーダ本集は一種であるが、ブラーフマナ以下はおのおの二種ずつ伝わっている。サーマ・ヴェーダ本集には三種、アタルヴァ・ヴェーダ本集には二種の別がある。ヤジュル・ヴェーダ本集はまず二種に大別される。マントラだけを集めたものを「白」、マントラと散文の説明部分ブラーフマナとを兼ね収めたものを「黒」と呼び、後者に四種の別が知られている。

以上により、広義におけるヴェーダが、いかに大規模な文獻群を形成しているかがわれると思ふが、さらにこれに附属する多数の補助文獻（とくに祭式の綱要書ストトラ類、注釈書類を加えるときは、実に一大叢書の觀を呈する。

しかしヴェーダはあくまで祭祀に本源をもち、かつて史実の記録や、哲学・倫理の記述を目的としたものではない。文学的価値にいたっては、その各部分につき、いちいちのしい差異を示す。主要作品の成立にも長い期間が想定され、およそ前一二〇〇年頃から前五〇〇年頃までにわたると考えられる。その間に、バラモン教文化の中心は、西北インドから北インドの中央部、ガンガー河の流域に移り、バラモン教権の確立、バラモン至上の社会制度、祭式万能主義の発達を見、その反動としてウパニシャッド哲学の擡頭があり、仏教興起時代につながる。したがってヴェーダの理解には、少なくとも初期の宗教・

神話、哲学思潮の變革、祭式の大綱、文化的・社会的背景等を知る必要がある。しかしこれらの問題のどの一つをとっても、簡単に説明できる性質のものではない。ここに一括して略述する代りに、翻訳によつて代表される作品あるいは作品群の各々については、その冒頭に短い解説をえ、必要に応じては、訳例の各個に説明を加えて読者の便宜を計った。ヴェーダは専門家にとつても難解な文獻である。訳文には通説に必要な補足をカッコに入れ、固有名詞や術語の簡単な説明をカッコの小活字で示した。後者はかならずしも常にくり返さなかつたし、文獻の歴史的連続性から見ても、なるべく最初から順を追つて読まれんことを希望する。またヴェーダ語は古典サンスクリット（梵語）と同一でなく、古風で莊重な文体で書かれているから、韻文の部分には文語体を使用した。簡潔と正確とを期したため、日常の文語用語から離れた点については、読者の寛恕を乞う。

ヴェーダ語およびヴェーダ文学の學術的研究は、前世紀の中頃ヨーロッパにおこつた。その後約一世紀の間に、基本的原典は批判的に出版され、貴重な翻訳・研究は相次いで現われて今日に及んでいる。ヴェーダ語は古代イラン語すなわちゾロアスター教の聖典アヴェスタの言語およびアケメニッド朝諸王の碑文に残る古代ペルシヤ語にもっとも近く、さらに古代ギリシヤ語・ラテン語・ケルト諸語・ゲルマン諸語・スラブ諸語と起原を同じくしている。この想定は印欧語比較文法の発達を促して花々しい成果を収めた。この一事によつても、ヴェーダはインド研究の出発点をなすばかりでなく、欧亜にわたる古代文化の研究に欠くことのできぬ資料である。（辻

四 ヲアルナよ、わが最大の罪は何なりし、

友なる讃美者を、なれが殺さんと欲するにいたりしは。そをわれに告げよ、欺きがたき自律の神よ。われ切に赦しを乞う、罪なからんと願きて。

五 父祖の犯せし罪よりわれを解き放せ。われらみずから犯せし(罪)より解き放せ。王なる(神よ)、牛盗人のごとく(縛められたる)ヴァシシュタ(詩人の名)を解き放せ、憤を綱より(解き放つ)ごとくに。

六 そはオのが意志ならず、ヴォアルナよ。そは惑乱なり、スラー酒・怒り・賭博・無思慮なり。年たけし者は若き者の過ちに責をもつ。眠りすら不正を防ぐものならず。

七 下僕が恵み深き(主人)におけるごと、われ罪なき者として、烈しき神にかしずかん。気高き神は思慮なき者を賢くせり。熱意ある者を富財のために励ます、さらに勝れて賢き(神)は。

八 この讃歌は、自律の神ヴォアルナよ、よくなが心に留められてあれ。われらが静居に幸いあれ。われらが出動に幸いあれ。汝ら(神)はつねに祝福もてわれらを守れ。

ヴォアルナの歌 その三(七・八九)

水腫病にかかった人が、ヴォアルナに赦免を乞う歌
この病思は、罪によってヴォアルナの縄索に縛めら

れた結果と考えられていた。

一 王者ヴォアルナよ、土くれの家(所埋葬)にな送りよ、このわれを。なさけも深く恵みあれ、高き稜威に御世しろす神。

二 よろめき歩むわがさまは、さながら張りし革袋。なさけも深く恵みあれ、高き稜威に御世しろす神。

三 うつけ心のあやまりに、いつしか罪を身に負いぬ。なさけも深く恵みあれ、高き稜威に御世しろす神。

四 水のま中に立つ身にも(水腫病の特徴た、瘰癧やしがてなるこの渴ぎ。なさけも深く恵みあれ、高き稜威に御世しろす神。

五 うつけみ人のかなしさに、神の心に背くとも、ヴォアルナよ、または愚かさに、なれが掟を破るとも、その罪ゆえにわがみらを、害い毀つことなかれ。

ミトラの歌(三・五九)

一 ミトラはその名を呼ばれたるとき、人間をして互に一致せしむ。ミトラは地と天とを支う。ミトラは瞬きせず、諸民を見守る。酥油(溶液)にみつる供物をミトラに捧げよ。

二 ミトラよ、誓約を守りてながために努むる人をして卓越せしめよ、榮養に富む者として、

アーディトヤ(ミト)よ。なが助けを受くる者は殺さることなく、克服せらるることなし。困厄の彼に達することなし、近くよりも、遠くよりも。

三 病患なく、強壯の食餌を喜びつつ、地の面の拡がるかぎり鞏固なる膝もて立ち、アーディトヤの掟を固く守りつつ、願わくばわれらミトラの好意に住せんことを。

四 頂礼にふさわしく、仁慈に富むこのミトラ、正しく支配する王者は、配分者として生まれいでたり。われら、崇拜すべき彼の好意に、その吉祥なる友誼に住せんことを。

五 偉大なるアーディトヤは、頂礼もて近づかるべし。彼は人間をして互に一致せしめ、讃美者に仁慈なり。もつとも称讃に値いするこのミトラに、彼の好むこの供物を火中に捧げよ。六 諸民を維持するミトラ神の恩沢は勝利をもたらず。その天的莊嚴は、もつとも多彩なる名声に富む。

七 その偉大によりて天を凌ぎ、名声によりて地を凌ぐ、広大なるミトラ、

八 援護の力あるミトラに、五民(五部族の人類)は服従せり。彼は一切の神々を支う。

九 ミトラは、神々および人間のあいだに、好ましき誓いにふさわしき榮養を作れり、祭壇に草を敷く人(祭祀)のため。

五 かく偉大なる両神は、讃美せられて、偉大なる名声と、广大なる主権とを、われらに与えよ、天地両神よ。われらつねに諸民の上に拡がり得んがため、讃うべき力をわれらに授けよ。

ヴァルナとミトラの歌（以下五篇）

ヴァルナはリグ・ヴェーダ神格中もつとも重要なものの一つ。宇宙の秩序・理法の崇高な守護者、欺瞞・虚言に対する峻烈な懲罰者として恐れられる。ミトラは元来「契約」の神で、ほとんどつねにヴァルナに随伴し、僅かに一篇の独立讃歌（三・五九）をもつにすぎない。両神はしばしばミトラ・ヴァルナの名で併称され、アーディトヤ神群の主長と仰がれる。この神群は、両神のほか、アルヤマン（「款待」バガ（「配分」）等をふくみ、道徳的・社会的要素を代表する。ヴァルナの起原は、異説が多く不明であるが、その性格は、ゾロアスター教の聖典アヴェスタ中の最高神アフラ・マズダーに比せられ、後世もつばら水神とされた。ミトラと起原を同じくするアヴェスタのミトラは、ヨーロッパにまで喧伝されたミトラ教の主神となつたが、インドにおけるミトラは独立性に乏しく、後に太陽・星に關係をもつにつれ、ヴァルナは月・夜に關係するにいったつた。

ヴァルナの歌 その一（五・八五）

一 最高の君主、名高きヴァルナに、崇高・深遠にして（彼に）好ましき祈りを歌え。その神は大地を太陽のために敷物として拡げたり、屠殺者が皮を拡ぐるごとくに。

二 彼は木々の上に空間を拡げたり。ヴァルナは置けり、勝利を競走の馬の中に、乳を赤牛の中に、意力を心の中に、火を水の中に、太陽を天に、ソーマ（神酒を捧る）を山に。

三 ヴァルナは（水）槽の口を下方に向けて、天地・空界に注ぎかけたり（雨を降）。それにより万物の王者は大地を濡おせり、雨が大麦を濡おすごとくに。

四 彼は地の面、天地を濡おす。ヴァルナが乳を欲するとき、山々は雲を身にまとい、力にみつる勇士（マルト）は（そを）弛む。

五 われ高らかに宣らふ、アスラの子、名高きヴァルナの、この偉大なる幻力を。彼は空界に立ち、あたかも規矩によつてのごとく、太陽によつて地界を測量せり。

* 特殊の神の称号。一般の神（デーヴァ）に比し魔力に富み、恐怖の念を起こせしめる点に特徴をもつ。ヴァルナ自身もアスラに属するが、ここではさらに本源的なアスラを指す。後には神に対して悪魔（阿修羅）の意味をもつ。

六 もつとも賢き神のこの偉大なる幻力を、何ものもかつて冒せしことなし、輝く水流の注入しつとも、ただ一つの海を水もて満たすこと

なしという（不可思議を）。

七 ヴァルナよ、われらがいかなる罪を、盟友または親友、あるいはさらに兄弟に對し、あるいは家族あるいは他の同居者に對し、かつて犯せしことありとも、ヴァルナよ、そを解き赦せ。

八 あたかも賭博者が博奕においてなすごとく、われらが欺瞞を行ないたりとも、そが意識せられたものたりとも、あるいはわれらの知らざるところなりとも、それら全てを弛き（結び目）のごとく解け、神よ、而してわれら願わくば、ヴァルナよ、汝の親愛たらんことを。

ヴァルナの歌 その二（七・八六）

一 この（神の）偉大によりて生類は賢明なり。彼は广大なる天地を分け隔てたり。彼は高き蒼穹を遙かに推しかかけ、天日を二重に推しやれり（太陽との進行を指す）。また大地を拡げたり。

二 われはわが身にかくぞ問う、いつの時にかわれヴァルナに親しむを得ん、怒りときて彼わが供物を嘉することやある、いつかまた心安けく神の恵みを仰ぎ得んと。

三 その罪を、ヴァルナよ、探り求めんとし、われはわが身に問ひ、問わんがために賢者に近づく。賢者は等しくわれにいう、かのヴァルナ汝に怒ると。

に流れゆく。かつてその威力により占め囲みたる（水）、その（水）の足下に、アヒは（今）横たわる。

九 ヴリトラの母は命を失いぬ。インドラは彼女に武器を撃ち下ろしたり。母は上にありき、子は下に。ダーヌ（^{ヴリ}の母）は横たわる、犢に添う牝牛のごとくに。

一〇 止まることなく休むことなき流れのま中に、彼の屍は置かれたり。水はヴリトラの秘所（^場）を越えて進む。インドラを敵とするものは、長き暗黒に沈みぬ。

一一 ダーサ（^{ヴリ}）を夫とし、アヒに看視せられて、水は閉じこめられたり、牝牛がパニ（^{悪魔}）によってのごとく。塞がれし水の出口を、（神は）ヴリトラを殺して開放せり。

一二 インドラよ、唯一神たる汝は馬の尾の毛に交じたり、彼（^{ヴリ}）が汝の戦端（^場）に反撃を加えたる時。汝は牛を勝ち取れり、勇士よ、ソーマを勝ち取れり。汝は七河を解放して流れしめたり。

一三 電光も雷鳴も、彼に何の効なかりき、彼が散らしたる霧もまた霰も。インドラとヴリトラとが戦えるとき、寛裕なる神は永久に勝利を博したり。

一四 アヒの復讐者として、汝は何者を見たりしや、インドラよ、勝ちし汝の心に恐怖起り、怯えし鷹のごとく、汝が九十九の河越えて、空間ほるか急ぎしとき。

* 雲草ソーマを地上にもたらした鷹の神話を諷刺してい

つたもの。

一五 ヴアジュラ手に持つインドラは、行く者、憩う者、角なきもの、角あるものの王者なり。かかる王者として彼は諸民を支配す。車輦（^{車輦}）が車輦を包むのごとく、彼は一切を包囲す。

インドラの歌 その二（二・二二）

一 第一人者と生まれいで、賢き神は意力もて、なべての神に勝れたり。力に満ちし稜威には、怖れ伏したり天も地も。その神の名はインドラ天。

二 震う大地をうち固め、揺らぐ山々とり静め、天も安けく支えたり。虚空の果てを測りては、その拡がりをいや増しつ。その神の名はインドラ天。

三 悪電アヒ（^{ヴリ}）を殺しては、七河の流れ滔々と、ヴァラ（^{悪魔}）の囲みを破りては、群れなす牛を奪還す。雲まに火（^電）を生む戦の猛者。その神の名はインドラ天。

四 神の力にものみな揺らぎ、ダーサのやから（^{アリアン}）影ひそむ。異部族びとの蓄えを奪いて取りぬ、勝ち誇る 賭博の巧者をさながらに。その神の名はインドラ天。

五 「恐ろしの神は、いずこに」（^{懷疑者}）、「その神はなし」と否めど（^{不信者}）、な疑いそ、賭物のごと、異部族びとの蓄えを、勝ち減らしゆく神

はまします。その神の名はインドラ天。

六 貧しき者を病む者を、悩みに喘ぐバラモンを、励まし恵み、石据えて 搾るソーマの酒の香を、嘉すや唇も美しき、その神の名はインドラ天。

七 馬・牛・戦車・村人も、彼の指示に従いつ。曙つぐる曉紅も、天翔る日も彼生みき。水の流れの道しるべ。その神の名はインドラ天。

八 戦の庭につどいてし、敵も味方もおのがじし、功績祈りて高らかに、一つ戦車の強者も、異口同音に呼びかわす、その神の名はインドラ天。

九 この神なくば勝利なし、勝つも負くるもままなれば、戈とる者の守り神。誰あらがわんその力、不壊なるものを彼知らず。その神の名はインドラ天。

一〇 罪に汚れし諸人は、いつしか彼が弓の的。傲れる者は神の敵。アリアン族に仇をなす、ダスヌ（^{第四節のダ}）もあわれ彼の犠牲。その神の名はインドラ天。

一一 春秋四十山深く、ひそみし悪魔シャンバラも、神の眼にあばかれつ。力に傲りわだかまる、ダーナヴァ電（^{ヴリ}）の殺戮者。その神の名はインドラ天。

一二 繋ぐ鼻綱七条の、たけき牝牛にたぐうべき、神の力に七条の 川も流れつ。名にしおう執金剛の神なれば、蒼穹めがけかけ登る、悪魔ラウヒに蹴落しつ。その神の名はインドラ天。

一三 天も敬い地も屈む、神にしあれば足曳の山もひれ伏すその力。手に振りかざす金剛杵(ウァジ)、ソーマの神酒に酔うという、その神の名はインドラ天。

一四 神に捧ぐる神酒・供物、神を讃うる歌に、祭祀を励む人の友。神呪の功力・神酒の酔い、供物に力増すという、その神の名はインドラ天。

一五 供物調え神酒捧り、祭祀いそしむ人のため、なが雄力にもちきたす 恵みは深し、なれこそは、偽わらぬ神。とことわに、なれがいととき友として、男の子数生み、願わくば、威儀ある下知を宣らましを。

インドラとヴァルナの歌(四・四二)

ヴァルナとインドラとは、その性格を異にしなから、リグ・ヴェーダの二大神格と認められる。この讃歌は、自讃の形によって、両神の特徴を称えている。

一 (ヴァルナ曰く) 主権は今や改めて、一切の生命を掌る王者われにあり。かくして一切の不死者(神)もまたわれに属す。神々はヴァルナの意志に従う。われは最秀の外貌を有する民(シア)を支配す。

二 われヴァルナは王者なり。アスラ(上記五五の注参照)の資格は、太初よりわれに確立せり。神々

はヴァルナの意志に従う。われは最秀の外貌を有する民を支配す。

三 われヴァルナはインドラなり。*われは威力により、広く深く固きこれらの両界(地天)、万有を、トヴァシユトリ(神工巧)のごとく知り、天地を創造して、これを維持す。

* インドラのなし得ることは、自分もまたなし得ると誇示したものである。

四 われは、湿す水をみなぎらせたり、天界を天則の座に支持せり。天則に従いて、アディティの子(無垢の子、すなわちアデーティ)は天則を尊奉し、地界を三重に拡大せり。

五 (インドラ曰く) 獲物を求めて駿馬を驅る人々は、戦闘において苦境に陥りたるとき、われを呼ぶ。寛裕なるわれインドラは、争闘をかもし、勝利の力を具えて戦塵を捲き起こす。

六 われはこれら全てのことをなせり。いかなる天的勢力も、あらがいがたきわれを遮がらず。ソーマ酒われを酔わしむるとき、讃歌(われを励ます)とき、際涯なき両界(地天)は畏怖す。

七 (詩人の言葉) 万有は汝をかく知る。そを汝は(今)ヴァルナに宣言す、(正しき)配分者よ。汝はもろもろの障碍(とくに悪魔)の撃滅者として知らる。汝は閉塞せられたる河川を解放せり、インドラよ。

八 われらの祖先、七聖賢はその場にありき、ダウルガハ(おそろが、犠牲として祭祀に)縛せられたるとき。彼らは彼女(次節に見えたるブル)の

ために、トラサダスヌ(王妃の子)を祭祀によりてかち得たり、インドラのごときヴリトラの殺戮者・半神を。

九 ブルクツア(王)の王妃は、汝ら両神に、供物と頂礼とによって奉仕したれば、インドラとヴァルナよ、汝らはそのとき彼女に、トラサダスヌ王を授けたり、ヴリトラの殺戮者・半神を。

一〇 われら福利を得て、富財によりて享樂せんことを、神々は供物によりて、牛群は牧場によりて。インドラとヴァルナよ、汝ら両神は、つねにわれらに乳牛を与えよ、乳を搾るを拒むことなき(牛)を。

アグニ(火神)の歌 その一(二・二)

アグニは火を意味し、神格化されて火神となつても、讃歌における描写は、自然の要素としての火を離れない。その起原は、太古における家炊の火の崇拜にさかのぼるが、リグ・ヴェーダにおける特徴の一つは、多くの居所を持つことである。天上においては太陽として輝き、空中においては電光としてひらめき、地界においては祭式の聖火として燃える。水中にもひそみ、樹木の中にもかくれて、木片の摩擦によつて生みだれる。とくに祭火として人間と密接な関係を持ち、神界の祭官、家庭神として尊ばれ、その浄化力が重んぜられた。また神話的には、魔類を焚殺する威力が称えられている。リグ・ヴェーダ開卷第一の歌。

一 アグニをわれ呼び讃う、祭祀の司、神聖なる祭官、もつとも多く財宝をもたらすホートリ(神を祭場に勧誘する祭官)として。

二 アグニは古の聖者により讃えられ、また今の聖者により讃えらるべきなり。彼のここに神々を勧請したたらんことを。

三 アグニにより(祭祀者は)日にけに財富を得んことを、名声にみち男の子さわなす繁榮を。

四 アグニよ、なれが総統する祭祀と祭事のみ、よく神々のもとに到達す。

五 アグニは、賢慮に富むホートリ祭官、真実にして名声もつとも輝かし。この神が神々と共にきたらんことを。

六 アグニよ、なれがけに、祭祀者に好事を恵まんと欲するとき、ながその恵みは実現す、アングラス(アグニの称呼)よ。

七 アグニよ、日にけにわれら祈りをこめ、額きつづなれに近づく、暗黒を輝かす(神)よ。

八 祭事の主宰者、天則の保護者、光彩を発つ(神)、おのが居所に増長する(なれに近づく)。

九 アグニよ、われらにとり近づき易きものなれかし、父の子におけるがごとく。幸あらんためわれらと共になれ。

アグニの歌 その二 (一・五八)

一 力より生まれたる不死者(力の権化の神アグニは、かつて(他より)促されたることなし、彼がヴィヴァスヴァット(祭祀者)のホートリ祭官・使者となりてより。もつとも直ぐなる道により、彼は空間を測量せり(通過により境を定めた)。彼は供物をもつて(諸神を)祭祀に勧請す。

二 おのが食物を確保し、不老なる(神)は、貪り食いつつ、叢に立つ。酥油(バター)の滲液を灑がれたる彼の背は、牡馬(のそれのごとく)輝く。天の背(穹蒼)のごとく彼は神鳴りつつ高く吼えたり。

三 ルドラ神群(マルト神群に同じ)・ヴァス神群により、現実(現実)に祭祀の司に推され、ホートリ祭官として座につける財富の克服者、不死なる神は、諸族のあいだに、人間のあいだに、車のごとく躍進し、正しき順序に従いて好き賜物を分配す。

四 風に煽がれて彼は、叢の上に、鎌なす舌をもつて、強く叫びつつ、思うがままに拡がるアグニよ、汝が貪りて、牡牛のごとく樹木を襲うとき、汝の通路は黒し(全てを焼く)、炎の波たつる不死者よ。

五 炎の歯をもつ彼は、風に煽がれて、勝ち誇る牡牛の畜群中におけるがごとく、林の中に息吹を吐く、ほむらだちつつ無限の空間をよぎりつつ。(その時)動かざるもの・動くものみな怖る、鳥類もまた。(以上山火の事)

六 ブリグの族(太古の祭官の一族)は、汝を人間にもたらせり、財宝のごとく貴重にして、人類にとり呼び求め易き汝を。ホートリ祭官として、アグニよ、いみじき賓客として、盟友のごとく神族に好ましき汝を。

七 七個の舌(祭式用)、祭官らが、もつとも勝れたる祭祀者として、祭事に際して選ぶアグニ、一切の財宝を運ぶ車(アグニ)を、われは美味なる供物もてあがむ。われは(汝に)財宝を乞う。

八 力の子(力をもつともよく具現する者、アグニ)よ、われら讃歌者に、今日完全なる庇護を与えよ、友情に富むものよ、アグニよ、(汝を)讃美する者を困厄より解放して、金属の城もて守れ、活力の子よ。

九 (汝を)讃美する者のために、掩護たれ、輝くものよ。寛裕なる者のために、庇護たれ、寛裕なるものよ。(汝を)讃美する者を、困厄より解放せよ。朝にいち早く、思想ゆたかなる彼(アグニ)の現われんことを。

ソーマ(神酒)の歌 (九・一二三)

ヴェーダ祭式の中心は、浄化した神酒(ソーマ・パヴァーマーナ)を聖火に投じて諸神に捧げ、残余を祭官その他の参加者が飲むにあった。同名の植物の茎を石でたたき、圧搾して得た液を羊毛の篩で濾し、木槽に注ぎ入れ、適度の水を混じ、牛乳等を加えて造った一種の興奮飲料で、詩人はこの調理過程とソーマの効能とを極度に誇張し、神話

化して歌い、一四箇をふくむリグ・ヴェーダ第九巻は、まったくこの種の讃歌から成っている。ソーマは神々、ことにインドラの愛好するところで、これによってその威力を増大し、人間はこれによって詩的靈感を得た。語形から見ても、ソーマはアヴェスタのハオマと一致し、その起原は古く、鷹がインドラのためソーマ草を天界から地上にもたらしたという神話もあるが、インドにおいては早くから実物を入手することが困難となつたらしく、代用物で満足し、今日植物学的にその本体を明らかにすることはできない。またリグ・ヴェーダ末期以後、ソーマが月神となつたのは、おそらく月が天的ソーマの容器と考えられたためであらう。

一 ヴリトラの殺戮者インドラをして、シャルヤナーヴァアツト(ソーマ草の名)に生ゆるソーマを飲ましめよ、彼がまさに勇武の偉業をなさんとして、力を身につくるとき。インドウ(ソーマ液)よ、インドラのために過ぎ流れよ(羊毛の神の毛の中を流れること)。

身を清めよ(ソーマ液が清められ、清澄となること)、方処の主(ソーマ)よ、アールジーカ(ソーマ草の名)よりもたされし恵み深きソーマよ。天則の言葉・真実・信仰・タパス(力熱意)もて掬られて、インドウよ、インドラのために過ぎ流れよ。

三 バルジャスマヤ(神雨)により育てられたる水牛(ソーマ)を、太陽の娘(詩歌の女神)はもたらせり。ガンダルヴァ(半神族)はそを受け取りて、ソーマに芳醇味を賦与したり。インドウよ、インドラのために過ぎ流れよ。

四 天則を語りつつ、天則により輝くものよ、真実を語りつつ、真実を行なうものよ、信仰を語りつつ、王者ソーマよ、行祭者により、ソーマよ、調理せられて、インドウよ、インドラのために過ぎ流れよ。

五 真に強力にして高大全(ソーマの)流れは、集まり流る。芳醇なる(ソーマ)の芳醇なる液は、合わり流る、黄金色なすものよ、祈禱により清められつつ。インドウよ、インドラのために過ぎ流れよ。

六 祭官が詩句を唱えつつ、パヴァーマーナ(自身を清化)よ、石もて撃つソーマに英気を催し、ソーマによりて恍惚を生むとき、インドウよ、インドラのために過ぎ流れよ。

七 つきせぬ光明のあるところ、太陽の置かれし世界、そこにわれを置け、パヴァーマーナよ、老ゆることなく滅ぶことなき世界に。インドウよ、インドラのために過ぎ流れよ。

八 ヴィヴァスヴァアツトの子(ヤマ、死者)が王たるところ、天界の密所のあるところ、かの若しき水のあるところ、そこにわれを不死ならしめよ。インドウよ、インドラのために過ぎ流れよ。

九 欲するがままに動き得るところ、第三の天空において、第三天(最高)において、光明に満てる世界のあるところ、そこにわれを不死ならしめよ。インドウよ、インドラのために過ぎ流れよ。

一〇 欲望と欲求との(満たさるる)ところ、

(太陽の)赤馬の住所のあるところ、祖霊(他界先祖)への供物と満足とのあるところ、そこにわれを不死ならしめよ。インドウよ、インドラのために過ぎ流れよ。

一一 歡喜と愉快、享楽と悦楽との存するところ、至高の欲望の成就せらるるところ、そこにわれを不死ならしめよ。インドウよ、インドラのために過ぎ流れよ。

アシュヴィン双神の歌(二・二八)

何らかの自然現象(たとえば朝夕)が本源をなしたとしても、その関係の早くから不明となつた一對の神格で、双神が個々に挙げられることはほとんどなく、同一の特徴によって不可分に結合されている。リグ・ヴェーダにおける双神の本領は、厄難から救済し、奇蹟的医療を行なうにあり、断片的ながらこの種の神話は、少なからず伝わっている。双神に挙げられた讃歌の数は、インドラ、アグニ、ソーマに次いで多く、古代における双神の重要性を示唆し、その別名ナーサトヤは、ヴァルナ、ミトラ、インドラと共に、西紀前十四世紀に小アジアに伝わっていた証拠がある。ただしアヴェスタにおいては、インドラと同じく、悪魔の列に伍するにいたつた。

一 汝らの車をして進みきたらしめよ、アシュヴィン双神よ、鷹に牽かれて飛び、恵みゆたかに、助けに富む車をして。そは人間の思想よ

りも速く、三座を擁して風のごとく疾走す、牡牛なす双神よ。

二 三座を擁して三部に分かれ、三輪を有して軽快に走る車を御して進みきたれ。われらの牛の乳をみなぎらせ。われらの馬を励ませ。われらの男の子を榮えしめよ、アシヌヴィン双神よ。

三 急速に下降し、軽快に走る車にありて、不可思議力ある双神よ、石の諧音(ツリマ草の茎を擗る石)を聞け。太古の賢者は、何ゆえに汝らを困厄にもっとも速かに馳せつくる者とは呼べる、アシヌヴィン双神よ。

四 車につながれ・天がける・快速の鷹が、アシヌヴィン双神よ、汝らを（ここに）運びきたらんことを、靈鷲のごとく雲の海越えて、供物の方に運びつつ、ナーサトヤ双神(アシヌヴィン)よ。

五 スールヤ(太陽)の娘、若き乙女は、快くうべないで、汝らの車に乘れり、勇ましき双神よ。汝らの麗しき馬、天がける赤き鳥は、ただちに汝ら運びきたらんことを。

六 汝らは、不可思議の術もて、ヴァンダナ(舜より)を（救いあげたり、威力もてレーバを（水中より救いいだせり）、不可思議力ある雄々しき双神よ。汝らは、トゥグラの子(フジ)を、海中より救いいだしぬ、またチャヴァーナを青春に返らしめたり。

七 汝らは、熱苦に陥(おとし)れたるアトリに、強壯と寒冷とを与えたり、アシヌヴィン双神よ。汝らは、盲いたるカンヴァに視力を回復せり、

彼の讚美を嘉納して。

八 汝らは、かつて艱難に落ちしシャユのため、その牝牛の乳をみなぎらせたり、アシヌヴィン双神よ。汝らは、艱を危難より解放せり、(牝馬) ヴイシュパラーに脚を回復せり。

九 汝らは、ベードウ(王)に、インドラに励まされ・アヒ(ヴリ)を殺戮する白馬を与えたり、アシヌヴィン双神よ、異部族人の熱心に呼び求むる・強力なる逸物、千金の獲物をもたらし、肢体強靱なる勇馬を。

一〇 勇ましき双神よ、われらは艱難にありて助けを求め、生れ気高き汝らを、恭しく呼ぶ、アシヌヴィン双神よ。われらの讚歌を嘉し、宝に満てる車を驅りて近づけ、われらが安祥のために。

一一 鷹の新鮮なる速力をもつて、ともどもにわれらに近づけ、ナーサトヤ双神よ。供物を捧げ、われ汝ら呼ぶ、アシヌヴィン双神よ、暁紅の永古変らず輝く時において。

ウシヤス(暁紅の女神)の歌(四・五二)

一 ここにかのくり返して立ちかえる光明は、東方に現われたり。暗黒より離れ、万物を分明に区別しつつ。今や、輝かしき天の娘なるウシヤスは、人間に道を開けかし。

二 多彩なるウシヤスは、東方に現われたり、

祭事において立てられたる柱のごとく。(ウシヤスは) 輝きつつ暗黒の罅みの扉を開けり、清く照り映え淨めつつ。

三 寛裕なるウシヤスは、輝きつつ今日、布施する者を照らせかし、彼らが恩恵を施さんのために。客荷(客荷)なる者は、光明なきところに眠らしめよ、覚むることなく、暗黒のただ中に。

四 女神よ、汝らの今日の訪れ、こはそも古きものなりや、または新らしきものなりや、ウシヤスよ。こはかつての訪れと同じものなりや、それにより汝らが、ナヴァクツヴァ・アンギラ・七つの口もつダシヤグヴァ(以上太古の聖仙)に、財宝を輝きもたらしたところの。財宝に富むものよ。

五 汝らはげに、女神よ、天則によつて繋がれたる馬により、一日のうちに万有の周りを巡回す、ウシヤスよ、眠る者を、二足のもの・四足のもの、生きとし生けるものを、活動のために覚ましめつつ。

六 彼ら(ウシ)のうちにありて、かの古きものは、そもいずこにありや、また何番のものなりや、それにより(神々が) リプたち(工巧の半と関係をもつ)の序列を定めたところの。輝かしきウシヤスが輝きてきたるとき、彼らは互に等しく、老ゆることなく、見分けがたかり。

七 これら(目前にありて) 吉祥なるウシヤスは、正にかつてありしものなり、勝れたる光輝を放ち、天則より生まれて真実なるもの、そのもとにおいて、祭祀を行ない、讚歌を歌い

つ唱えつつ励みし者が、一日にして財富を勝ち得しところの。

八 彼ら(ウシ)は、(今も)同じく東方より進みきたる、同じ場所より、同じく拡がりつつ女神ウシヤスは天則の座より覚めて、放たれたる牛群のごとく動く。

九 これら互に等しく、色褪することなきウシヤスは、(今も)同じく進みきたる、黒き怪異(闇夜)を、その輝く姿もてかくしつ、明らけく清らに輝きて。

一〇 天の娘なる女神よ、輝きて、子孫に満つる財富をわれらに与えよ。快き床より汝らに応え覚めて、われら願わくば、よき男の子に満つる富の所有者たらんことを。

一一 天の娘なるウシヤスよ、汝らの輝くとき、われは祭祀を旗としてかざし、そを汝らに乞う。われら願わくば、人々のあいだに名声を博さんことを。天なる神をわれらに与えんことを、地なる女神もまた。

ラートリー(夜の女神)の歌(二〇・二七)

一 女神ラートリーは近づきつつ、その眼(星)もていたるところをうち眺めつ。(女神は)あらゆる美を身につけたり。

二 不死の女神は、広大なる空間を満たせり、低きところも、高きところも。(女神は)光明

によりて暗黒を駆逐す。

三 女神は近づきつつ、妹なるウシヤス(曙の女神)と交替せり。暗黒もまた遠ざからんことを。

四 女神は今日われらのためにあれ。その汝の到来により、われらは家に帰れり、あたかも鳥が木の巢に帰るごとくに。

五 村人も家に帰れり。足あるものも、翼あるものも帰れり。はたまた餌を貪る鷹すらも。

六 牝の狼を遠ざけよ、牡の狼を。盗人を遠ざけよ、夜の女神よ。而してわれらのために越え易かれ。(以上夜中の安全を祈る)

七 闇は黒さを増しつ、まざまざとわれらに近づけり。ウシヤスよ、負債のごとく、そを取りたてよ。(暗黒を除き去れ)

八 われは汝に(讃歌を)捧げたり、(牧夫が)牛群を(牛舎にやる)ごとく、——天の娘よ、そを受納せよ——あたかも勝利者に賦頌を捧ぐるごとくに、ラートリーよ。

スールヤ(太陽神)の歌(二・一二五)

一 神々の輝く面、ミトラ・ヴァルナ・アグニの眼(太陽)は、今し昇りつ。スールヤは天地・空界を満たしぬ。動くもの・動かざるものの霊体として。

二 スールヤは、若人が乙女のと追うごとく、輝く女神ウシヤス(紅曉)のあとに従う、敬虔なる人々が、各々幸福を求めて、幸福をもたらす軀をつくるとき。(毎朝の祭事の開始を農夫の始業に喩えたもの)

三 幸福をもたらすスールヤの金色の駒は、多彩に輝き、駿足にして、歡呼をもつて迎えられ、恭しく天の背に登れり。彼らは一日の中に天地を馳せめぐる。

四 そはスールヤの神性なり、そは彼の偉大なり、彼が(夜の)営みの中途において、拡げられたる(黒き)布をたたみおさむことは。彼が金色の駒を駈より(出して)繋ぎたるとき、夜はみづからのためにその衣を拡ぐ(その中に消え去るため)。

五 スールヤは、中天に、ミトラ(曙の神)とヴァルナ(夜の神)とのこの色(光明と暗黒と)を現わす、(人をして)見しめんがために。彼の一つの現れは無限にして輝き、彼の駒は他の黒き現れをたたみおさむ。

六 神々よ、今日太陽の昇るとき、(われらを)困厄と誹謗とより救え。そをわれらにかなえよ、ミトラ、ヴァルナ、アデITY(無垢の女神)、シンドゥ(河、神地)は、はたまたデイヤウス(神天)は。

サヴィトリの歌(二・三五)

名実ともに最も明白な太陽神スールヤのほか、太陽の機能の一面を代表すると思われる神格があり、サヴィトリは明瞭にその一つで、金色に輝き、